朝日 俳壇 歌壇

小林貴子選

御神渡りひびきて星座かたむけり　（昭島市）大関　崇央

蕉翁の塚に遊ぶや手毬唄　（近江八幡市）若林　白扇

何となく心温まる年賀状　（甲府市）藤巻　嘉秀

冬帽子お洒落な父に母が惚れ　（奈良市）上田　秋霜

しーんもこもこもこもこと初日の出　（八王子市）額田　浩文

革命の思想なりけり親鸞忌　（長崎県波佐見町）川辺　酸模

男子にはにこり応える雪女　（成田市）かとうゆみ

トランプと取引近し戎笹　（川崎市）多田　敬

元日の朝刊にある未来かな　（豊中市）三木由紀子

白障子向こうへ夜が落ちていく　（東京都府中市）古川　泰

【評】一句目、諏訪湖が結氷し亀裂の走る「御神渡り」だが、温暖化で数年出来ていない。二句目、芭蕉の墓は琵琶湖のほとりの義仲寺にある。手毬唄が可愛い。三句目、心温まる年賀状とは、受け取ってみたい。四句目、かっこいいお父さん。

長谷川櫂選

三日はや国会前に久枝立つ　（さいたま市）関根　道豊

☆正月や孫を土産に子が帰郷　（茨城県東海村）樫村　好則

年賀状ああこの人も仕舞ふなり　（岐阜県神戸町）林　宏尚

七草粥昭和百年寿げり　（埼玉県宮代町）鈴木　清三

六歳の筆圧みごと年賀状　（東京都杉並区）伊東　澄子

孫も子も帰らぬ里の初景色　（羽曳野市）菊川　善博

福島も能登もかなしいお正月　（成田市）かとうゆみ

賀状見て終ひせしこと悔いにけり　（茂原市）山口　明雄

余りたる年賀葉書へ投稿句　（福島県伊達市）池田　義昭

孫にあげ子からいただくお年玉　（船橋市）安藤　健次

【評】一席。正月早々、作家の澤地久枝さん。九十四歳。二席。孫は何よりの土産。平和な日本の光景。三席。今年でやめるという。もはや絶滅が危惧される風習。十句目。金は天下の……かくて世界は巡りゆく。お年玉、年賀状の句あまた。

大串章選

白寿翁なほも気魄の年賀状　（相模原市）今井　雅裕

黄泉の国何処にありや星月夜　（名古屋市）中西　惠子

墓原てふ枯野に夫を残し去る　（香川県琴平町）三宅久美子

☆本読むは旅をすること冬銀河　（相模原市）のなかあけみ

尹錫悦といふ名おぼえて去年今年　（横浜市）佐々木ひろみち

公然と我が生き恥や去年今年　（船橋市）斉木　直哉

元日の白鳥遠くかがやけり　（会津若松市）湯田　一秋

☆正月や孫を土産に子が帰郷　（茨城県東海村）樫村　好則

スナックの客の顔して雪女郎　（大阪市）山仲　大介

若き日に戻りて友へ賀状書く　（中間市）櫻井　健一

【評】第1句。「白寿翁」の「気魄の年賀状」とは素晴しい。「なほも」がアクティブで力づよい。第2句。自分の死後の居場所はどこだろう。星の輝く夜空を眺めながら思い巡らす。第3句。「墓原」を「枯野」と言ったところに悲しさが滲む。

高山れおな選

☆本読むは旅をすること冬銀河　（相模原市）のなかあけみ

筆始はの字るの字のまるが好き　（東京都世田谷区）渡辺　礼司

大寒の大統領となりにけり　（八王子市）額田　浩文

木枯にあらゆる裾のはためけり　（和歌山県由良町）藤田　昌幸

年輪は気象の手紙去年今年　（佐倉市）杉山　勝利

卵焼き十個を使ひ節料理　（岐阜市）三好　政子

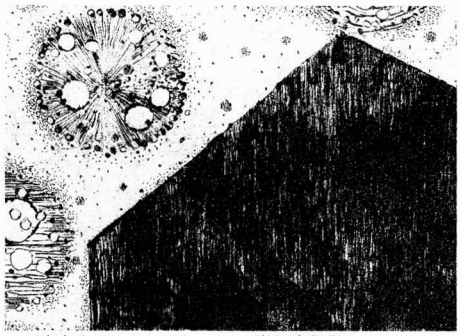
焼きたての菓子を持ち寄る女正月　（川西市）糸賀　千代

去年今年矢玉のような幼来て　（桑名市）藤井シゲ子

堆き賀状が地位でありし頃　（奈良市）中島　澪

おおきたかきたかとおとしだま　（北九州市）成松　千秋

【評】のなかさん。空間を超え、時間を超えて。季語がよく利いている。渡辺さん。終筆で穂先をくにゅっとさせるところ、確かに気持ちいい。額田さん。〈冬了る底知れぬものと思ひしが〉（相生垣瓜人）という日がやがて来るのではあるが。



〈南向きマンション〉　岩尾恵都子

短歌時評　再び、モダニズム

小島　なお

「短歌史の中で石川信雄は砂に埋もれていたコーナーストーンのような存在かもしれない」。『石川信雄全歌集』（書肆侃侃房）のあとがきはそう書き出される。編者は石川信雄の姪である鈴木ひとみ。

人影のまったく消えた街のなかでピエ・ド・ネエをするピエ・ド・ネエをする

『シネマ』

前川佐美雄『植物祭』、齋藤史『魚歌』、加藤克巳『螺旋階段』など、戦前のモダニズム短歌は、社会への抵抗や現実を超越するシュルレアリスムを志向した新しい時代の表現であった。なかでも石川信雄の『シネマ』が持つ自在な口語の呼吸と詩精神は刊行から約九十年経った今でも清新に感じられる。

本歌集では戦中戦後を詠んだ第二歌集『太白光』や歌集未収録歌、戦地からの手紙などに加えて、遺品から発見され、今回初めて世に出る歌集『紅貝抄』が収載されている。

カービン銃きみも持つべく不様なる日本国は捨ててしまえよ

『紅貝抄』

生きものの苦渋のまなこだらだらと雨はしたたる青きネオンに

『シネマ』のポエジーを引き継ぎながら、戦争経験を内包した命令形や、退廃的な湿度には鋭い痛みと抒情がある。

戦争の波に押し流され、石川信雄はじめモダニズムの作品群の評価は十分になされていない。ときに私よりも私たちが主語となる現代の対社会への連帯感覚と、戦前の文学運動には通じるものがある。「ピエ・ド・ネエ」はフランス語であかんべー。いま再びモダニズムに心が揺り動かされる。

（歌人）

風信

久永草太歌集「命の部首」　獣医学科在学中から動物病院に勤めて1年経つまでに詠んだ400首を収めた第1歌集。第34回歌壇賞受賞作の「彼岸へ」も収録。（本阿弥書店・2420円）

砂山信一歌集「珠洲の海」　石川県珠洲市で中学教師を務めた著者が2023年に出した私家版の再刊。自宅が全壊した能登半島地震後に詠んだ歌を末尾に収録。（いりの舎・1100円）

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます（週に2作品まで）。QRコードから。